

AGU 環境人文学フォーラムの発展

Developing the AGU Environmental Humanities Forum

研究代表者 結城正美

YUKI, Masami

本研究プロジェクトは、文学部附置人文科学研究所研究プロジェクトとして 2021 年度に始動した AGU 環境人文学フォーラムの発展を目的とするものである。

環境問題のそもそもの原因は人間のものの考え方や価値観にある。文化、歴史、言語、ジェンダー、人種をはじめとする多様な問題域において、人文学諸分野は意味や価値の問題に取り組んできた。そうした人文学諸分野の研究者が、地球システムの危機的状況への応答を模索し、相互に触発し合いながら蜘蛛の巣がきのごとく協働する動きが、環境人文学 (environmental humanities) である。

プロジェクト三年目の 2023 年度は、新たに麻生えりか (英米文学科教授)、伊達直之 (同)、トーマス・ダブス (同)、松木ほのか (英米文学専攻博士後期課程) をメンバーに迎え、サウンドスケープ研究 (鳥越けい子)、日本文学 (佐藤泉)、英文学 (麻生えりか、伊達直之、トーマス・ダブス、松井優子、松木ほのか)、米文学 (西本あづさ)、米文学・エコクリティシズム (清水美貴、結城正美)、ポストコロニアル文学 (橋本智弘)、言語哲学 (エリン・マクレディ)、現代史・ジェンダー研究 (チェルシー・シーダー) といった多分野を横断する対話を試みた。具体的には、主にオンライン研究会を通して、メンバーが個別に進めてきた研究を環境という視座からとらえ直し、相互の研究の接点を可視化および創出することにより、環境をめぐる問題を多角的に考察する学術的コミュニティ——AGU 環境人文学フォーラム——の発展を目指した。オンライン研究会は、メンバーだけでなく学内外に開いたオープンな研究会とした。

2023 年度の新たな動きとして、本フォーラムを窓口として本学が参加するノルウェーとアジアの環境人文学国際共同研究 Asia-Norway Environmental Storytelling Network (ANEST) における研究教育交流の深化が挙げられる。ANEST は、ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 International Partnership for Excellent Education, Research and Innovation (INTPART) による共同研究で (拠点大学: スタヴァンゲル大学)、ノルウェーの三大学、アジアの六大学の間で研究教育交流を進めている。その ANEST の

研究代表者である Finn Arne Jørgensen スタヴァンゲル大学教授を4月に客員教授として本学に迎え、年度初回のオンライン研究会を開催した。Jørgensen 教授の本学滞在は一ヶ月と短期ではあったが、フォーラムメンバーと対面で意見交換する機会もあり、研究交流を深めることができた。他に、10月に国立台湾師範大学で開催された ANEST ワークショップに本フォーラムから四名が参加し、1月から3月にかけては ANEST 教育交流事業として、フォーラム特別研究員である清水美貴(博士後期課程3年)と松木ほのか(同2年)がスタヴァンゲル大学に留学した。スタヴァンゲル大学は環境人文学センター Greenhouse を擁する世界屈指の環境人文学の拠点であり、短期留学は環境の問題への人文学的アプローチを習得する絶好の機会であった。

オンライン研究会および ANEST 活動参加の概要を以下に示し、2023年度の活動報告とする。なお、オンライントークの番号は、2021年度からの通し番号である。

Online Talk #18 (15 April 2023)

“Time, Technology, and Nature at the Norwegian Cabin”

Finn Arne Jørgensen (Professor, Environmental History, University of Stavanger)

The leisure cabin is a central part of Norwegian culture. Traditionally a simple wooden house located in the mountains, by the sea, or in the forest, the cabin is a weekend and holiday getaway for many Norwegians. While the cabin draws on hundreds of years of history, it is also full of modern tensions: what should a cabin look like? How should it work? What should the relationship between the cabin and the surrounding landscape be? What should one do at the cabin and how should one do it? These are not simple questions, but are at the center of extended cultural controversies in Norwegian society.

This talk will introduce the cabin as a historical, cultural, and material phenomenon before exploring how Norwegian cabin owners use technology to negotiate their relationship to time and nature at the cabin. It will draw on concepts like authenticity and technological mediation in order to understand how the experience of nature cannot be separated from the technologies through which we experience it.

Works-in-Progress #1 (13 May 2023)

「故郷の池の精霊たち：カワウソ、オオカミ、そして…」

鳥越けい子（総合文化政策学部・教授）

故郷の池（武蔵野三大湧水池のひとつである善福寺池）とその周辺の土地に棲まう精霊たちとの出会いや再会について報告した。報告者は先ず、専門とするサウンドスケープの考え方が基本とするのが「主体と場所」であることを踏まえ、故郷の池を「いつかは向き合うべ

き場所」として位置づけた。次に、2000 年からの自邸（風聴亭）での暮らしや、2010 年から現在に至るまで継続している「池の畔の遊歩音楽会」と関連する諸活動のなかで、故郷の土地との対話が深まっていった過程を解説した。そうしたなかで、池の「河童伝説」の正体がかつてその池に生息していたカワウソであると考えようになったこと、地域でよく目にする護符に記されているオイヌさまは、絶滅したオオカミであること、さらに、自邸すぐそばに位置する大和市神社の御神体が、約 100 年前にその祠を建てた人の息子が銃で撃ったオオワシであるという証言をもとに、身近な動物が精霊や神として故郷の土地を護ってくれているという実感を語った。

Works-in-Progress #2 (10 June 2023)

“Embodied Interpretation and the Nonhuman in Formal Semantics and Pragmatics”

Elin McCready (文学部英米文学科・教授)

This talk considers how representing embodiment in natural language at the interpretative level can be used to deanthropomorphize narrative (and language more generally). I begin with a brief introduction to semantics and pragmatics and the current state of play in these fields, and then turn to an overview of my joint work with E. Ottosson on the topic of anthropomorphic narrative, which we claimed to be unavoidable in natural language due to presuppositions about embodiment that appear there. There we explored alternative notions of narrative stemming from craft -- which we proposed to view as a form of narrative turning away from natural language -- and from the ‘gathering narratives’ of Ursula Le Guin. An alternative is to decenter the human body at the interpretative level using the tools of semantics and pragmatics. I present an initial attempt at formalizing embodiment and show how it might be used to take language away from the human.

Online Talk #19 (8 July 2023)

「地球と植物に向かって自らを開いてゆく人類学」

箭内匡 (東京大学大学院総合文化研究科・教授)

このトークでは、私自身の学問的ヴィジョンの中で、「人類学 anthropology」(=人間の学)がどんな道筋を経て「地球と植物に向かって自らを開いていく」のかについてお話ししたいと思う。導入として、文化人類学が「文化」・「社会」から「イメージ」・「自然」へと焦点移動していく今日的な動きについて述べたあと、自然の中でも質・量ともに圧倒的な重要性を持つ植物という存在——それなしには我々は呼吸すらできない——にまっすぐ向かおうとする新たな人類学のアプローチについて論じる。具体的には、植物学の助けを借りながら(人間や動物とは対照的な)植物独自の存在様態をあらためて把握したあと、南米先住民の民族

誌に触発されつつ、我々自身の思考を植物の存在様態の方に接近させていく、「植物人類学」のヴィジョンを提示する。終盤では、この植物人類学の延長線上で、「地球に向かって自らを開いていく」という点についても二、三の論点を提示したいと思う。

Book Discussion #2 (16 September 2023)

ディベシュ・チャクラバルティ『人新世の人間の条件』

橋本智弘（文学部英米文学科・准教授）、清水美貴（文学研究科英米文学専攻博士後期課程）

人新世の人文的研究を牽引する歴史学者ディベシュ・チャクラバルティの『人新世の人間の条件』は、惑星規模の環境危機が共通認識となった現在において必読の書である。本書は、地質学的脅威になった人間が、生存可能性をかけて脱人間中心主義的な地球観を獲得し、人間そのものを再定義する必要性に迫られていることを克明に論じている。

本ブックディスカッションでは、まず、清水が『人新世の人間の条件』を概観し、重要概念等を整理した。続いて、橋本准教授が、『現代思想』2020年1月号に掲載された篠原雅武氏と斎藤幸平氏の対談「ポスト資本主義と人新世」を手掛かりに、人新世の人文的議論をめぐる困難さについて論じた。その後、参加者を交えて議論を行なった。

ANEST Workshop (13-14 October 2023, National Taiwan Normal University)

“Teaching Through and With Environmental Storytelling”をテーマとするANESTワークショップが国立台湾師範大学で開催され、ノルウェー、台湾、中国、日本から約30名が参加し、10の研究報告と2つのパネルディスカッションが行われた。本学からは結城正美、エリン・マクレディ、松木ほのかが研究発表を行い、清水美貴が聴講参加した。

鼎談：環境人文学の冒険 (22 December 2023)

奥野克巳（立教大学教授）、管啓次郎（詩人・明治大学教授）、結城正美（青山学院大学教授）

明治大学大学院理工学研究科建築・都市学専攻総合芸術系、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻、そして本学文学研究科英米文学専攻の三大学院単位互換制度に基づく〈環境人文学プログラム〉（2024年度開設）のプレイベントとして、奥野克巳（立教大学教授）、管啓次郎（詩人・明治大学教授）、結城正美（青山学院大学教授）による鼎談「環境人文学の冒険」を本学で対面開催した。なお、三大学院単位互換制度に基づく〈環境人文学プログラム〉は、環境人文学の高等教育プログラムとしては日本で最初の例となる。

鼎談では、環境人文学とは何かという問いに斬り込みながら、分野や大学の垣根を越えた人間中心主義の解体と知の再調整の重要性と可能性をめぐって議論した。

Online Talk #20 (20 January 2024)

「ファンタジー文学と環境：D. W. ジョーンズ作品における神話・動物・自然を例に」

松木ほのか（文学研究科英米文学専攻博士後期課程）

このトークでは、イギリスのファンタジー作家 Diana Wynne Jones が手がけた 40 冊以上の児童文学作品のうち、犬の体を持つ主人公の冒険を描いた小説 *Dogsbody* (1975) を中心に、Jones の「動物ファンタジー」のあり方について考察した。はじめに、「動物ファンタジー」というジャンルの成り立ちや特徴に触れながら、*Dogsbody* とあわせて動物を主人公にした短編 “What the Cat Told Me” (1993) と “Little Dot” (2003) の二篇を扱い、それぞれにおいてファンタジー特有の手法を用いて単なる擬人化にはとどまらない動物と人間の関係が描かれていることを論じた。さらに、*Dogsbody* において、独自の宇宙観やウェールズの神話を編み込むことによって提示される、新たな視点でとらえた地球の自然観や地球に根付く死生観について分析した。

Book Discussion #3 (2 March 2024)

藤原辰史『分解の哲学』

鳥越けい子（総合文化政策学部・教授）、西本あづさ（英米文学科・教授）

第3回の読書会では、藤原辰史『分解の哲学』（青土社、2019年）について、コメンテーターである鳥越けい子教授と西本あづさ教授を中心に、ディスカッションを行った。

人びとの実生活に基づきながらも、「分解」というキーワードから自身の研究領域への知的類縁関係を作っていく藤原の論について、社会的現実を背景にして生まれたサウンドスケープ研究の専門家である鳥越教授は、「曲を創作することを composition と呼ぶ音の世界で、分解（decomposition）はどのような意味を持つのか」という問いを中心とし、本書で論じられる農学や生態学とサウンドスケープの研究との共通点を探った。

また、アフリカ系アメリカ文学を専門とする西本教授は、本書で藤原の提示する「なぜ美しい人間と自然との関係を築こうとした結果ナチズムに繋がってしまったのか」という根本的な問いに共感し、本書における「分解」や「リサイクル」という概念と、Black Lives Matter 世代の作家 Jesmyn Ward (1977-) の *Salvage the Bones* (2011) が描き出すテーマとの関連性について考察した。

以上の分析を中心として、「分解」をキーワードに食、歴史、思想史、芸術論など様々なトピックを論じた『分解の哲学』について、活発な議論が行われた。

2023年度の主な活動は以上のとおりである。他に、年度末にメンバー対象のミーティングを行い、活動を振り返るとともに今後の計画について話し合った。なお、AGU 環境人文

学フォーラム開始以降の活動と関連情報は、ウェブサイト <<https://www.agu-environmental-humanities.com/>> で公開している。